

「悪魔の策略を逆手にとって」

エペソ人への手紙 6 : 10 - 13

March.1.2026

エペソ人への手紙 6 : 10 - 13 (パウロ)

Preface

今日で7回目になりますが、このエペソ書の聖書箇所から、悪魔の策略について探り学んでおります。

悪魔は、私たちが望まないようなことを私たちに与えながら、または、望まないようなシチュエーションに私たちを追いやりながら、神なんかいないと思わせ、神を恨むように仕向けていきます。

人によって望まないことは、少しずつ違いがあるかもしれませんが、掘り下げて行きますと、ほぼ同じようなことではないかなと思います。

肉体的な病や痛み、所有や財産を失うこと、物事が願ったように運ばないこと、あまり好きにはなれない人と出会い、その人と否が応でも同じ時を過ごし、同じ空間にいななければならないこと等だと思えます。

Part One

聖書を見ますと、悪魔の策略によってこのすべてを一度にドバっと経験させられた人がいます。

ヨブ記に登場してくるヨブです。

ヨブという方は、あっという間の短い間に、所有していた財産の全てを失いました。

一夜にして、愛する息子や娘たちを失いました。

さらに追い打ちをかけるかのように、死んでしまう方がよっぽど楽だと思えるほどの苦しくて、痛くて、よく分からない原因不明の病にかかり、足の裏から頭までつぺんまで悪性の腫物が覆い、その痒みと痛みをどうすることも出来ずに、土器のかけらで体中を引っ掻き回して、全身血まみれのような状態に陥りました。

それでも神の御前にひれ伏し礼拝するヨブに向かって、そんなヨブの一番の理解者、同伴者、配偶者であるはずの妻までもが、「あなはた、これでもなお、自分の誠実さを堅く保とうとしているのですか。神を呪って死になさい」と傷口に塩を塗るどころか、瀕死のヨブにとどめを刺すような言葉でヨブを刺し貫きました。

もちろんヨブの奥さんも、一夜にして財産を失い、お腹を痛めて生んだ愛する子どもたちすべてを盗賊のような者たちの手によって打ち殺されてしまったわけですから、胸が張り裂ける悲しみとやるせなさで、夫のなお神の前に誠実であろうとした姿が偽善に思え、やせ我慢に思え、むかついたんだと思います。

十分に彼女の気持ちを察することが出来ますし、「神を呪って死になさい」という言葉を口にする程の気持ちを誰も責めることは出来ないと思います。

さらに今度は、ヨブの三人の友人たちによる慰めているようで一切慰めにならない言葉をずっと浴びせ続けられ、一緒に居たくもない彼らとずっと同じ時を過ごさなければなりませんでした。

そしてこのすべてが、悪魔がヨブを潰そうと、誠実で直ぐな心を持ち神を恐れて悪から遠ざかっていた、地上でこんな人は誰もいないと言われる程の信仰をへし折ろうと、神をのろわせようと、人をのろい、自分という存在をのろい、結局は、ただの罪人として燃えるゲヘナに投げ入れようとした悪魔の策略でした。

しかも、しかもです。

このすべての悪魔の策略を、主なる神様自ら許可されました。

これが、私たちが戸惑わせます。

ヨブ記のヨブばかりか、詩篇の至るところでダビデが、「主よ、あなたはいつまで御顔を隠されるのですか。主よ、なぜあなたは遠く離れて立ち、苦しみの時に身を隠されるのですか」と詠う程に、神を信じる信仰者たちがずっと悩み、戸惑ってきました。

では神様は、私たち人を戸惑わせ、悩ませ、苦しめ、痛みつけ、悪魔のように私たちが潰すことを目的にそうされているのでしょうか。

もしくは、そこにも、主なる神様の聖なる目的があるのでしょうか。

あります。

そこには、確かな三位一体なる神様の聖なる目的があります。

その聖なる目的の中を生かされ生き抜いた、神にあるキリストにある信仰の証人たちが、雲のように私たちを取り巻いています。

ヘブル書 11 章、12 章では、その証人たちの名前を一人一人読み上げながら、彼らを神の聖さにあずからせようと訓練し、やがて義という平安の実を結ばせ、神が彼らのために用意された都を、天の故郷を相続するに相応しい者へと造り変え、実際に神の国を相続させた事実を説いています。

(長い箇所なので全部は見ませんので、家に帰りましたら、一度ゆっくりじっくりヘブル書 11 章、12 章を読んでみて下さい。一部だけ見てみたいと思います)

ヘブル人への手紙 12 : 1 - 12 : 12 (パウロ)

Part Two

神様というお方は、私たちが望んでいることを与えることを喜ばれる方です。親の喜びも、子どもが願っているものをプレゼントしてあげることだと思い

ますが、そのために、子どもが何を欲しがって望んでいるのかを知りたくて、何が欲しいのかを子どもに聞くことがあります。

同じく神様も、私たちに何を望んでいるのかをお聞き下さることがあります。

例えば、ソロモンが千匹の全焼のささげ物を献げた時、神様はソロモンに「あなたに何を与えようか」（I列王記3：5）とお聞きになりました。

すると、ソロモンは神様に、王としての使命を忠実に果たすために、知恵と聞き分ける心を求めました。

そんなソロモンに神様は、「あなたは長寿や富や敵のいのちを求めることをせず、正しい訴えを聞き分ける判断力を求めたのでわたしは嬉しいし、それを与えよう」とお応えになりながら、願ってもいない富と誉れまでお与えになりました。

またイエス様は、体の痛んだ人がイエス様の前に出て来ると、「何を望んでいるのか」とお尋ねになりました。

ある時、目の見えない物乞いが、イエス様が近くに来ておられることを知ると大声で、「ダビデの子のイエス様、私をあわれんでください」と叫び始めると、イエス様はその人のところに近づいて、「わたしに何をしてほしいのですか」とお聞きになりました（マルコ10：51）。

すると、その目の見えない人は、「先生、目が見えるようにして下さい」と答え、その望んでいることに応えて下さいました。

三位一体の神様は、私たちの望みを満たして下さいのお方です。

先程、ダビデが、「主よ、あなたは私の苦しみの時に、どこに隠れておられるのですか」と訴えたことを紹介しましたが、同じダビデがこのようにも告白しています。

詩篇103：2－5（パワポ）

神様は私たち人を良いもので満ちたらせるお方であり、良いもので満ちたらせたいと、満足させたいと思っておられます。

ところが、先程のダビデの告白のように、ヨブのように、主なる神様は、私たちが望まないようなことを、望んでいないようなところを経験させ、通らせようとされます。

なぜならば、神というお方は、ヘブル書であったように私たちの父親であり、私たちの助け主であり、私たちをお造りになられたお方であるから、私たちを私生児のようにほっぽっておくことをなさいません。

望んでいない人に出会わせ、望んでいないことに出会わせ、望んでもいない方法で、私たちを大いに戸惑わせることをなさいます。

でも不思議と、月日が経ち振り返ってみると、私たちが願っても望んでもいないその中に、その時は知りがたく極めがたかった豊かな恵みを隠しておられたことを悟るようになります。

Part Three

エペソ書を書いた使徒パウロ先生ご自身もそうでした。

神様は、使徒パウロが望んでもいない願ってもいない「肉体のとげ」を通して豊かな恵みをお与えになりました。

その肉体のとげと言うのが、重い病なのか、痛みなのか、持って生まれた身体的特徴なのか、何なのかは具体的に記されていませんが、使徒パウロ先生の手紙を見ますと、苦しくて、辛くてたまらない肉体のとげを取り除いて下さるよう熱心に祈り願ったとあります。

でも神様は、その肉体のとげをあえて取り去らずに、その痛みとともに生きるようお命じになりました。

しかもです。

その痛みと苦しみを生み出す肉体のとげは、パウロを打つための「サタンの使い」でもありました。

コリント人への手紙第二 12 : 7 - 10 (パウロ)

パウロが望んでいたものは、健康と強さでした。

ですが神様は、使徒パウロ先生にとげを与えることをもって、彼を弱めました。

使徒パウロ先生は三度も、そのとげを去らせて下さるよう祈りました。

でも神様は、その願いを拒絶することをもって、お応えになりました。

「わたしの恵みはあなたに十分である。わたしの力は弱さのうちに完全に現れるからである」とです。

神様の拒絶も、祈りの応答の一つです。

でも神様は、パウロ先生が最も拒絶したいものを通して、最も大きなプレゼントを下さいました。

謙遜です。

遜るという、謙遜というプレゼントを下さいました。

神様が、サタンをも用いて使徒パウロ先生に肉体のとげをお与えになった理由は、自分で自分のことを誇らないようにするためでした。

私たちはともすると、自分で自分のことを誇ります。

祈って与えられたものであるはずなのに、あたかもそれが元から自分のものであったかのように誇り、または、祈ったから与えられたと誇り、神がお与え下さった恵みでしかないにも関わらず、その恵みを自慢のために用いてしまいます。

使徒パウロ先生は、サタンの使いである肉体のとげのために、遜ることができました。

自分よりも他者が優れていると思えました。

罪人の中の罪人だと思えました。

肉体のとげを取り去って下さらない神様に恨み節を並べ立てることを通しても、罪人の中の罪人だということを知っていったのかもしれませんが。

自分にとってマイナスでしか思えないようなことを神様はあえて用いなさって、人を助け、人を慰め、人の痛みを知り、人の必要に答え、人に同情出来、人の目線に立てるようにして下さったことに感謝を覚えられるように、遜らせて下さいました。

成功を用いて、上手くいくことを用いて、人から羨ましがられるようなことを用いて、人とは違うという優越感を用いて、「私が死にキリストが生きている」ということを実感させるのではなく、痛みをもって、我がうちに住まう悪を持って、マイナスをもって、キリストの力が私を覆うということを実感することができました。

私の話で申し訳ないのですが、このパウロ先生の告白を読むと、私自身のことのように思えてしまうところがあります。

つい最近も、家内にこんな風に吐露しました。

「僕の信じている神は、僕の痛みなんか取り除いても下さらない無能な神なんだよ。全知全能、そんなのちゃんちゃらおかしいぐらい、僕の肩の痛みを取り除いて下さらないし、僕の肩を癒して下さらないけち臭い神なんだよ。イエス様の服の裾に触れるだけでも癒えるなら触りたいぐらいだけど、イエス様の姿どころか、イエス様の服の裾の裾も現わして下さらない聞いても下さらない耳のない神なんだよ。サタンの使いにまんまとやられている僕なんかに関心がないんだよ」と、言いようのない肩の痛みとしびれを感じながら妻に吐露しました。

ただ黙ってじっと聞いてくれていた家内が、一言いいました。

「かわいそうに、本当に痛いんだね。その痛み何とかしてあげたいけど、何ともしてあげられなくてごめんね。でもね、神様、私たちに物凄い恵みをこれまで与え続けて下さったよね。だから、大丈夫。その痛みにも理由があるはずだから。」

「確かに理由がある」と思えました。

どこの病院に行っても直せない、手術を受けたけれども治らない、分からない、「このまま暮らしていくしかありません」と肩の権威と評されるお医者さんからも言われてしまうような神がお造り下さったこの肩をなんで癒して下さらないのだろうかと考えた時、色んな理由が思い浮かんで来ました。

人の肉体的な痛みを見下げていた自分を振り返り、五体満足で体が思うがままに動き運動神経まで抜群だったら100%自分勝手に生きようとしているだろうと思え、肩の痛みが無かったら毎日の健康を保つために体操もしないだろう

うし、暴飲暴食をし、自分の体のことは自分が一番よく分かっているなんて思いながら、神様に「癒して下さい」と跪いて祈ることもなかつたろうし、それでもその痛みの意味を神に問い、神の癒しを信じ、イエス様について行くことが一番幸せなんだと思え、これまで与えられた恵みを考えましたら、心が安らぎました。

神様の前に遜らなければと思え、自分の人生自分で何とかしたいという思いに満ち溢れていて、遜れていない自分の姿を見るような気がしました。

正にサタンは、私の心を神様から引き離そうと肉体のとげを与え続けようとするけれども、神様はむしろそれを逆手にとって、愚痴だろうが、皮肉だろうが、痛みや悲しみの中にあっても神様に訴えるように祈り、私を神様に繋ぎ止めて置くために用いて、しかも、キリストの力が私を覆うために、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇るという逆転の恵みに至らしめようとして下さっているということに気付かされました。

「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです」とイエス様仰いましたが、私たちが神の前にあって貧しい者であることを認めるという祝福に至らしめるために、私たちを苦しめ、痛めつけ、潰そうとする悪魔の使いのような策略をも逆手にとって導いて下さるお方、それを良きものと代えて下さることがお出来になるのが、聖書の説く唯一の神なんだということに、正に、身をもって知るような思いになりました。

神様が、使徒パウロ先生に働くサタンの使い・肉体のとげを赦された理由は、高慢にならないようにするためでした。

その痛みをもって遜らざるを得なくなり、神を思わずにはいられず、人の痛みと同調せずにはいられない、キリストのゆえに、弱さ、侮辱、苦悩、迫害、困難を逆に喜べる謙遜な人にするためでした。

謙遜ほど良いプレゼント、謙遜ほど祝福された品性はないでしょう。

神様は、高慢な者を退け、心の貧しさを人の前に神の前に認める謙遜な者に大きな恵みを施すことを約束して下さいます。

そして、ご自分の子とした信じる者たちを何としてでも謙遜にしようと、サタンの策略までお用いなさって、謙遜な人へと造り変えて下さいます。

主なる神様は、使徒パウロ先生が望んでもいなかった弱さを通してキリストの力をプレゼントして下さいました。

Conclusion

神様は、本当に私たちが拒否したいことを通して驚くほどのプレゼントを下さいます。

私たちが心から拒絶したい人を通して、私たちの人格・品性を磨かれます。

心底拒絶したい場所を通して、私たちを成熟させます。

ヨセフもそうでした。

不条理に嫌われ、落とし穴に落とされ、奴隷として売られ、良いことをしたのに牢獄に何年も閉じ込められるという誰もが拒否したい拒絶したい、サタンの策略と思えるような状況を用いなさって、多くの人々の命を救う者としてお立てになりました。

しかも、謙遜という最高の品性を、神様から練って頂きました。

イエス様も然りです。

イエス様が最も拒否したかったのは、十字架でした。

十字架の道は、苦難と苦痛の道だったからです。

しかし、父なる神様は、十字架の苦難を通して、復活の栄光へと導いて下さいました。

サタンは、イエス様のかかるとに噛みつきましたが、イエス様は復活をもってサタンの頭を砕きました。

今ここにおられる方々の中に、日々の暮らしの中で到底受け入れられない、受け入れたくない状況や関係、または苦痛がお有りでしょうか。

その中に、神様が隠しておられるプレゼントがあるかもしれません。

私たちの目には嘆きでしかなく、傷でしかないかもしれませんが、神の手の内にあっては、それが恵みの種となります。

神様は、私たちが望んでいることを下さることもありますが、もっと深い愛によって、私たちが真に必要としているものを下さいます。

また時には、私たちが拒絶したい正にそのことそのものを通して、最も貴重なものを完成されます。

だから私たちの戦いは、その状況との戦いでももちろんあると思いますが、その中にどれだけ父なる神を、御子イエス様を、聖霊なる神様を見出すのかの戦いなんだと思います。

サタンは、私たちの置かれた中に、神を見出せないようにしようとします。

だから、私たちはまだ、結論を出してはならないでしょう。

神様が、その結論を書いておられるからです。

そして、神の結論は、いつでも恵みで終わります。

お祈りいたします。

祝祷：詩編103：2b、4b、5a